

## 「コロナ禍で食べて寝るだけ腹メタボ」

西川武彦

平均寿命を越えて人生の終盤に入った今になって、コロナを怖れて外出もできずに家に幽閉されるというのは、なんとも非情である。足は弱り、少しの散歩でも、家を出て足の動きがリズムに乗るまで、しばらくはふらつく有り様だから情けない。

企業OBペンクラブ川柳分科会の今月の兼題は「食べる」。筆者が詠んだ一句は、「食べ汚し 雷落ちて 皿洗い」だ。これが嫌になって無然とした面持ちで玄関から飛び出した。

…とはいえ、コロナ禍である。若者があふれるシモキタの街をぶらつくわけにはいかない。まして電車になるなど、怖くて足がすくむ。というわけで、向かったのは、わが家からとぼとぼ歩いて片道十五分余りの京王線笹塚。その駅前にある銀行で用を足し、並びの紀伊国屋書店で、新聞の書評に載っていた肩の凝らない新書本を求めた。

呆け始めたこの頃は、暫く前に読んだ本を衝動的にまた求めるということもあるから、読みたい本のタイトル、著者名、出版社をメモにした紙を持ち歩くことにしている。「図書館で借りればよいのに…」といわれることもあるが、その習慣がないので面倒くさいのだ。

かくして、狭い書齋はごったがえし、足の踏み場もないほどだ。ふらついて倒れ、若いころ求めて未だ棄て切れない PENTHOUSE や PLAYBOY などに埋まって、あの世に運ばれるかもしれない。

本を買ったあとは、帰路にある玉川上水につながる水幅1mほどの細い川で、餌を探す水鳥のペアを暫し見つめてから家路につく。暫しの休憩でもある。筆者と同じ年恰好の男女が、同じ場所で同じものを眺めていることがままあるので、気分によっては、人を選んで、怪しまれない範囲で、ちょっと声をかけることもある。

「つがいですかねえ？」というこちらからの一言に、「…そうですね」とでも短い一言がかえってくればなんとなく嬉しいのだから、他愛無いこと甚だしい。

最後になりましたが、標題に使ったのは、「食べる」の兼題で筆者が詠んだ一句です。